

①短期大学部

② 入試区分

Ⅱ期

③ 出題科目

現代の国語・言語文化（古文・漢文を除く）

④ 出題の意図

問題の一は、永井玲衣の文章「問いでつながる」から出題。「対話」における「問い」の重要性について述べた論説文。設問では、漢字の書き取り・読み、キーセンテンスの解釈、キーセンテンスの理由説明、空欄補充（キーワード・接続語）、指示語の具体的内容などを問うている。問題の二は、本田和子『異文化としての子ども』から出題。「こども」の「非連続・断片的」なありようについて大人の視点から論じた評論文。設問では、漢字の読み、比喻表現の意味、キーワードの表現意図、慣用句の空欄補充、キーセンテンスにおける筆者の意図の読み取り、本文の趣旨の把握などを問うている。問題の一・二とも、論説的文章の基本的な読解力をはかる問題となっている。

現代の国語・言語文化「古文・漢文を除く」

一 次の文章を読んで、あとの設問（1～6）に答えよ。

「もう分断という言葉を見アきてしまいました」^①

誰もいなくなつた部屋のホワイトボードに、それは書き残されていた。わたしはしばらく、かすれた黒いインクの連なりの前に立っていた。大学生が書いたというのはわかるが、誰の字なのかはわからない。何を思つてそれを書いたのかも、わからない。ただ、ひどく疲弊しているように思われた。ここにあるのは、怒りだろうか、諦念^③だろうか、淋^{さび}しさだろうか？

この小さな叫びを、わたしたちはどう受け止めたらいのだろうか？

*

対話が必要だ。だがわたしたちは対話に絶望している。

社会の問題が語られるとき「もっと対話がされるべきだ」と求める声は多い。気がつけばいろいろなことがぬるりと決まっていた、というのが自分と社会の基本的なコミュニケーションだと捉えているひとは多いだろう。もっと説明があるべきで、もっと対話がされるべきなのに、誰かによって急いで決断されてしまう。もしくは、まだ十分に耕^④されていないテーマなので、これからより対話が必要だと抽象的に結論づけられてしまう。

だが、わたしは問うてみたい。わたしたちは本当に「対話をしたい」^⑤と思つているのだろうか？

「べき」と「したい」は異なる。^⑤この微妙だが決定的な違いに、わたしたちは甘えている。必要ではある。だが、やりたくない。やりたくないが、必要である。論じることではできても、自分はしない。したくない。

しかしそれはそうだ。わたしも基本的にやりたくない。まず怖い。対話が怖いというより、他者が怖いのだ。とりわけ政治的なテーマだと、恐怖は増大する。そもそも、政治的なことについて、誰かと誰かがやりとりをしている姿を見ることがさえ、嫌と感じているひとがいる。

ある場で、高校生と話していて、気がついた。^⑥言論空間の重要性、対話の必要性を論じようとしても、何だかかみ合わない。どこかすれ違っている。かれらにとつての「言論」を掘り下げてみると、SNSでの攻撃的なやりとりがイメージされていた。「論じる」ことは、過激な意見を押し付けることであり、「批判」は炎上であり、「対話」は論破であった。

分断を埋めようと努力するはずの行為が、分断を生む手立てとして現れていた。

哲学対話という場をひらいている。哲学対話とは、人びとときき合い、考え合う場であり、さまざまな実践者が、それぞれの仕方^⑦でモサクしている。わたしのひらく場では、参加者から日常の中での「問い」をききとっていくことがはじまる。

「このあいだ、義母とアクセント論争をしてしまった」

「なんで違いについて、『いいね』って言えないんだろう」

誰かのもやもやとした「わからなさ」が、ひとを呼び込んでいく。もし、一人ひとりのもやもやが、ただぼつりとそこに置かれるのなら、ただのつぶやきや個人の悩みとされてしまう。しかし「問い」だったらどうだろう。問いは、

A をたっぷりと含んでいる。それゆえに他者を必要としている。

*

わたしの考える対話は時間内に「決断」「合意」を目指すような、積み上げていく時間ではない。

B 、わか

らなさを丁寧に確かめていく、掘り下げていく時間である。決断するためには、その話し合いの時間がまた別に必要だ。

対話は、何とかつながろうともがくためにある。

そのとき、わたしたちをつなぐのは「問い」である。二つに分断させる質問でもなく、外からやってきた、考えなくてはいけない議題でもない。みんなの問いであり、「わたし」が参加できると考える問いだ。

それでも、わたしたちの社会には、考えるべきことがたくさんある。決めなければならないこと、ギンミ^⑧されなければならないことがある。戦争、気候変動、経済危機、差別など大きな枠組みもさることながら、日々たぐさんのニュースがなだれ込んでくる。何もかもが速すぎて、判断する前に流れていく。判断のための知識を集めようにも、濁流のような情報と、竜巻のような一部の論争を見て、やめておこうと立ち去ってしまう。

ならば、まずはつながることのできる問いをさがそう。問いをひらこう。自分には関係なく、触れることができない、あるいは触れたくないと思っていることにも、問いはかくれている。もちろん、自分の生に根ざした切実なことにも。

問いが見つかれば、その先に、誰かがいる。わたしは何かここからはじめてみたい。^⑨

（永井玲衣「問いでつながる」〈『朝日新聞』二〇二四年四月二七日東京本社夕刊掲載〉による）

設問

1 傍線部①②③④⑦⑧について、カタカナは漢字になおし、漢字はその読みをひらがなで記せ。

2 傍線部⑤「この微妙だが決定的な違いに、わたしたちは甘えている」とはどのようなことか。次のア～エから最も適切なものを選んで記号で答えよ。

ア 対話はしたい人がすればよいと責任転嫁している。

イ 自身の対話に対する消極性から目をそむけている。

ウ 「べき」と正論を言うことで自己満足をしている。

エ 対話はやりたくないというわがままを言っている。

3 傍線部⑥「言論空間の重要性、対話の必要性を論じようとしても、何だかみ合わない。どこかすれ違っている」について、「何だかみ合わない。どこかすれ違っている」理由を本文に即して四十五字以内で述べよ。

4 空欄Aに入る最も適切な語句を本文中から五字で抜き出して答えよ。

5 空欄Bに入る最も適切な語を次のア～エから選んで記号で答えよ。

ア つまり

イ しかも

ウ たとえば

エ むしろ

6 傍線部⑨「わたしは何とかここからはじめてみたい」の「ここ」は何を指すか。本文中のことは使って、二十字以内で述べよ。

二 次の文章を読んで、あとの設問（1～6）に答えよ。

子どもの大群が、どこからともなく一斉に現われ、ワーツと駆け出して、画面から溢れ出す。そんな映画の一シーンがあった。ただ、それだけのことなのだが、不気味な戦慄に身体の奥深くが震えたことを想い出す。

先に触れたように、無数の小さなものたちがワヤワヤと無方向に動き廻る姿は、ゆえもなく私どもの肌①に粟を生じさせ、なにがなし不安と焦燥を感じさせたりする。そして、ばらばらと散らばった子どもたちの勝手な動きも、時として同じような印象を引き起こさせることがある。無方向、無計算に跳びはねる生氣あるものは、私どもを何故か脅かす力を持つらしい。

例えば、小学校の休み時間、授業終了のベルと共に、解放された子どもたちが教室から溢れ出してくる。途端に学校中が跳びはねる小悪魔③で充滿し、整然とした校内の空気は騷擾の渦に巻きこまれてにわかに混沌の相を呈する。大人たちは、なんとなく手も足も出ない思いで、始業のベルを心待ちにするだろう。ベルが鳴りさえすれば、時間割という枠の中に彼らをはめこみ、強引に手綱を引きしぼって、とにもかくにも、一定の時間はひとまとめにしておくことが出来るのだから。

自由に、エネルギーに動き廻る子どもたちの活力を、私どもが時として肯定し得ず、逆に一抹の不安すら抱かされて、早く制禦しよう④と焦立つのは、何故なのだろうか。彼らがあまりにも自然に「ばらばら」でありすぎ、統一などというものと徹底して無関係に見えるとき、私どもの日常的秩序の感覚は、秘かに危惧の念を抱く、とでもいうのだろうか。

それに、子どもたちの言動は、私どもの目に、あまりにも気まぐれで不可解に見える。例えば、いま泣いていた子どもが、もう笑っている。昨日まで大好きだった玩具が、今日はもう捨てられている。野球選手志望者が、突如、宇宙飛行士の候補者に変貌する。彼らの見事なまでの非連続性、終始、首尾の一貫を欠く振舞い方は、大人たちを呆れさせ、

失望させ、時には怒らせることもある。子どもとは、なんと了解困難な、意味不明の存在であることか。

幼児の遊びを観察していた大学生が、自身の記録を読み返して首を傾けた。心を動かされ、面白さにわくわくしながら記録したはずなのに、改めて読み直すと、あまりにも統一を欠き、意味不明である、と。

例えば、砂場で山を築いていた男児の一人が、突然、木の板を叩き始める。と、もう一人も、一緒になって木の板を叩きながら、「雨だ 雨だ」。先の子どもも声を揃えて、「雨だ 雨だ」。二人は板を打ち鳴らしながら、「雨だ 雨だ」とあたりを駆け廻る。こんな経過が熱中した筆づかいで記録されているのだが、このとき、観察者である自分は何に魅され、何を了解したというのだろうか。

あるいは、「ままごと」のゴザの上を消防署に見たてて、たむろしていた子どもたちが出動した。「火事だぞー」と。一歩おくれで、後から駆け出した一人が、歌うように口にする言葉は、「早く早く、急いでいいもの買ってこよう」^⑦。この小さな消防署員は、消火活動に出動するのだろうか。それとも、おやつでも買いに行くのだろうか。

これら子どもたちの行為は、辻褄の合った物語にされることを拒み、さながら、その不統一性、意味不明性にこそ真骨頂があるといったげである。私どもが、意味の一貫性という網を差し延べるや否や、それらは素早くこぼれ落ち、「ばらばら」と散らばって、こじんまりと掬い取られることを拒否するのだ。私どもの眼からは、「非連続」「断片的」とみなされる彼らのありようは、大人と子どもの間のどのような関係を物語るのだろうか。

私どもは、事象を「物語」として、つまり因果関係的に一貫性を持った意味のまとまりにおいて把握することに、あまりにも慣れすぎている。というより、それ以外には事象を受けとめるすべを知らないのだ。

(本田和子『異文化としての子ども』による)

設問

1 傍線部②④⑤⑧⑨の漢字の読みをひらがなで記せ。

2 傍線部①は身体にどういうことが生じるのを意味しているのかを説明せよ。

3 傍線部③で筆者はなぜ子どもを「小悪魔」と表現しているのか。文脈に即して説明せよ。

4 傍線部⑥は次の慣用句をふまえた表現である。空欄に入る生き物の名を次のア～エから一つ選んで記号で答えよ。

いま泣いた がもう笑う

ア すずめ イ こねこ ウ からす エ やぎ

5 傍線部⑦のセリフを変えて、次の段落で言う「辻褄の合った物語」にしたい。どこをどう変えたら、いかに辻褄が合うのか、説明せよ。

6 この文章で筆者が主張する内容に最も近いことを述べるものを次のア～オから選んで記号で答えよ。

ア 子どもは無軌道で勝手放題を好む存在だが、大人も十分に共感できるような世界に住む。

イ 大人は子どもたちの純真で自由な発想をわすれて墮落したから、彼らを見習ってもよい。

ウ 大人は因果関係が整い、意味のまとまりとして首尾一貫した物語を当たり前としている。

エ 群れて駆け廻る子どもに不安な印象を抱くのは、彼らが大人への反抗心を秘めるからだ。

オ 大学生が子どもの遊びに理解を示すには彼らが大人の「物語」の呪縛から脱したらよい。

一	
1	① 飽 ⑧ 吟味
2	イ
3	高校生にとっての「言論」は、SNSでの攻撃的なやりとりがイメージされているものだから。 わからなさ
4	エ
5	つながることのできる問いをさがすところ。
6	
二	
1	② しょうそう ④ たづな
2	さめはだ（鳥肌）が生じる。
3	小さいうえ、善悪をわきまえずに、無秩序な（勝手な・統一性を欠いた）行動をして、大人を心配させ、困らせるところを「小悪魔」にたとえた。
4	ウ
5	「いいもの買ってこよう」を「消火に出動だ」などとしたら、消防署でここで、火事がおこったというシチュエーション（設定、おぜんだて）と辻褄が合う。
6	ウ